

図書館流通センター

インターネットビジネス利用の現場から



「週刊新刊案内」では、ジャンル別に分類された新刊書籍の書名、著者名、版元、価格が紹介され、書籍によっては短い内容の紹介文や表紙の画像データまで盛り込まれている。それも1000点を超える数のデータが、毎週金曜日の夜にきちんと更新されている。おまけに過去半年分にまでさかのぼって検索できるサービスまである。

似たような書籍データベース検索サービスの例では、ニフティサーブからゲートウェイしている日販（書籍取り次ぎ大手）が1分当たり290円、日外アシストの同様のサービスでも1分200円（2400bpsでの利用）。身銭を切って使っている人ならお分かりだろうが、これは決して安い金額ではない。が、当然ながらインターネット上での図書館流通センターの検索サービスはタダ。

手間もコストも膨大にかかるであろうこういったデータベースを、どういう目的で制作し、何のために利用料金フリーで公開し、どうやってビジネスに結びつけているのか。また、まったく余計なお世話だが、ちゃんと採算が取れているのだろうか。

出版社や印刷所の集まる文京区茗荷谷の同社に、取締役電算機室長の菅原徳男

図書館流通センターという図書流通の専門企業が今年1月から自社サイトを公開した。ここでの目玉が「週刊新刊案内」とよばれる国内の新刊書籍を網羅する情報ページだ。

レポート 喜多充成

さんを訪ねた。

顧客は図書館だけ、
商品は書籍とデータベースだけ

まず企業概要から聞いてみた。

「年間の売上高は160億～170億円、700万～800万冊近くを扱い、出版社、取次、書店を含めて出版業界では25位という位置にあります。業界外の方ですとあまりお聞きになったことがない会社かもしれませんが」（菅原さん）

ご指摘のとおり、取材をすることになるまで耳にしたことがなかった（失礼！）。が、それも当然で業務案内には、こうある。

「株式会社図書館流通センター（略称：TRC）は、全国の公共、大学、専門、学

校などの図書館をお客様とする図書館専門企業です。TRCの仕事は、（1）図書館への書誌データ提供、（2）図書館への装備付き納本、という大きな2つの側面を持っています」

つまり顧客は図書館だけ、商品は書籍とデータベースだけというわりきった会社なのである。ここで上記の（1）にあたるマスターのデータベースは“TRC MARC”と呼ばれているものだ。

“MARC”とは「機械可読目録（マシン・リーダブル・カタログ）」の略語で、レーザーなどで読みとれるようにしたコード番号のことである。要はバーコードラベルに振られる、一冊の書籍を特定するための「本の背番号」と思っただけじゃない。それが転じてマスターの書籍データベースを



さす言葉として使われるようになったのだ。

図書館の機能として重要な位置を占める「検索」は、こういったコード体系があることを大前提としているが、これは元をたどれば図書館の目録カードから始まったもの。

「もともと図書目録カードを維持・供給していた財団法人日本図書館協会という団体があり、そこが持っていた図書目録カードのもとになっているデータベースを継承する形で1979年に創業した会社です。当時のデータ件数は7万~8万件でしたが、現在では130万件強のデータに成長しています」(菅原さん)

そして同社のサイトで公開されている新刊書のデータベースは、この“TRC MARC”に毎週加えられる情報を「二次利用」したものだ。

WWWサーバー上のサービスだけでなく、メーリングリストやFTPによるデータ提供も行っている。ほかにもフロッピーディスクや磁気テープの郵送、FDトランスファー(ISDN回線を介したディスクイメージの複写転送機)など、デジタル情報は考えられる限りの手段で顧客(図書館)向けに提供してきた。そもそも印刷媒体による「週刊新刊案内」があったわけだが、印刷や郵

送の手間ヒマを考えれば、ネットワークを介してデータをやりとりするようになるのは当然の流れといえよう。

ちなみに昨年のデータ提供件数実績は1500万件強。図書館専門企業としての同社の市場シェアは納本の金額ベースで5割、データの利用件数では7割をしめるという。つまり全国の公共図書館の予算の半分が同社の売り上げとなり、われわれが図書館で本を借りるとき、その本に貼られたバーコードラベルのコード番号は10館に7館の割合で同社が割り振ったコード番号がつけられているということになる。

この競争力の根源が累計130万件強にのぼるTRC MARCであり、その一部が今まさにインターネットに「流れ出よう」として

データベースを維持するには、
たいへんな手間がかかる

“TRC MARC”の場合、約40人の専門スタッフが、取次業者から流れてくる新刊書をいったん溜めて、実物に即する形でデータを入力してつくられている。項目数は1件につき128項目。たいへんな手のよう



にも思えるが、ひょっとしたら「引越したり」「死亡」したりしない「書籍」に即したデータベースなのだから、量が多だけでフォーマットに従って入力してしまえば終わりではないか、入力の仕組みさえ作ってしまえば案外簡単な作業なのではないかと聞いてみたところ、「とんでもない!」と大きな声で否定されてしまった。

「目録のデータベースを“枯れた”データベースなんて言われる方も多いんですが、全然そんなことはありません。これは維持していくためにもたいへんな手間がかかるんです。

たとえばある本が売れてすぐ続編が出てきた。すると、過去のデータにさかのぼって“続き物である”という情報を前のデータに加えていかなくちゃいけない。

あるいは著者の方が別のペンネームで本を出したとすると、過去の作品まで全部洗い出しをしなくちゃいけないということもある。

また、今まで同姓同名で同一人物だと思ってた著者がじつは違う人間で、それを分けなくちゃいけない……ということを一生涯懸命やっているわけです。

よく例に出すのは“スズキケンジ”さん。アナウンサーの鈴木さんもいれば、美術家の鈴木さんもいて、作家もいてというような世界なんですね。これをきちんと分別していかないと、図書館のレファレンス業務にたえられないわけですよ。

ある作家を指定して『この人はありますか』と聞かれた場合に、全然違うジャンルの人を同姓同名だからというので、『これも



ホームページ

索引はジャンル別に分けられている



登録すると、個人でも購入できる

サーバーアドレス

URL <http://www.trc.co.jp/trc-japa/index.htm>

そうです』と出すわけにいかないですからね。

また外国の著者の場合ですと、日本の場合は片仮名で表記していますが、統一された読み方がないんです。たとえばスチーブソンがスティーブソンだったりスチーブンソンだったり。ファーストネームの表記方法まで入れると25通りの読み方があるんです。JFKもJ・F・ケネディもみなジョン・F・ケネディであるということを示さなければならぬ。これが目録の技術なんですね。そのための人名典拠データベースというのを別にもっておりまして、東洋人系で十数万、欧米人で4万件近いデータベースになっています」(菅原さん)

こういった地道な作業の積み重ねが「データベースの精度」を保証している。単に件数が多いとか、アップデートが迅速というだけでは、これほど多くは受け入れられなかったに違いない。

「今は大半の図書館が電算化もしくは電算化を意図して運用されていて、検索や貸し出し管理にはその図書館の蔵書を網羅したデータベースがなくてはならないのは当然ですが、発注の段階からデータがあるということを前提とした業務の流れができあがっているのです。たとえばある本を発注してまだ手元に届いていないとする。その本が在庫切れなのか装備(ラベルやビニール

を貼る)中なのか、発送は済んだがまだ届いていないのかという状況が現在では分かるようになっていきます」(菅原さん)

図書館側にニーズがあり、その要望を聞きながらどんどん手直しをしてきたことで、結果的に図書館という特定用途向けの強力なデータベースができあがった。しかもそのデータベースは多くの図書館で、日常の業務運営に不可欠のものとなっていたのだった。

選定委員が図書館にお勤めの本を選ぶ

これまで説明したような「精度の高いデータベース」とビジネスの上で対をなすものとして「確実に本を入手できる体制」が必要になる。

「どういうことかといえますと、書籍は年間4万8000冊も新刊が出て、なおかつ1冊当たりの刷り部数がせいぜい2000冊~3000冊ですよ。これを全国2万件あまりの書店と公共図書館3000館が取りに行くわけです。となれば実際に手に入るかどうかが大きなポイントになります。

図書館さんがよくお買いの本については、あらかじめ埼玉県新座の物流センターのほうに本をストックしております。どういう本をストックするかについては選定委員という方を選ばせていただいて、その選定委

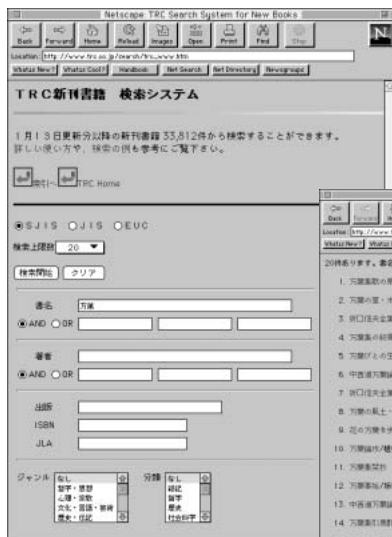
員の方が、図書館の方がおそらく買うであろうという本を選んでるわけです。いわばコース料理をあらかじめ用意しているのです。そのリストに載っている本であれば、あらかじめ当社で数を確保するわけですから必ず手に入る。続き物の本や年鑑などを漏れなく継続的に納入するメニューもあります」(菅原さん)

こうやって確保した書籍は、それに対応するデータとセットで図書館に納める。図書カードの作成やバーコードラベルの貼付なども行うし、ハードメーカーと協力して図書館の運営システムの構築まで手掛けることもある。図書館という大口安定顧客ががちりつかむために、社内の仕組みを図書館向けに特化し、ビジネスの足場を固めているわけなのである。

多くの人に知ってもらうことは将来への重要な布石になる

だが、将来的にこのデータを新たなビジネスに結びつけようという目論見は当然出ているに違いない。インターネットで「週刊新刊案内」を公開し始めたのは、そこまで視野に入れての試みだろうと考えられる。

現状ではモノ(書籍)と情報(書誌デー



新刊書籍の検索画面



書籍データの例



検索結果が表示される



国内の出版社へのリンクページ

タ)がセットになって取引されるから、データベースの維持作成にかかったコストも回収できているわけだが、データそのもので利益を出していくためにはどんなハードルを乗り越えなければいけないのだろうか。

「本の情報を有料化しようというのは、ほんとうに難しいですね。相手が図書館なら買っていただけるとしても、一般の個人の方は大きな書店に行けば本が山積みになっていて、歩き回って手にとって探せるわけですから、すごく難しい。」

こういった書誌データベースを利用する場合、誰が受益者になるのかということを考えていくと、必ずしも一般ユーザーさんだけではないだろう。版元さんも、データベースに登録したことで消費者の方との接点が増え、それが売り上げにつながるのであれば版元が受益者という考え方もできるかもしれない。将来は版元さん側に何らかの負担を求めていくという考え方もできなくはないわけです。あくまで考え方としてだけの話ですけど」(菅原さん)

「ただ、持っているものがデータベースですから、これはいかにして複写を増やしていくかが長い目で見れば利益につながることは間違いない。そのためにインターネットに情報を上げて、多くの人に知ってもらうことは将来への重要な布石になると考

えています」(菅原さん)

自社サーバーの開設にあたって同社はInfoWebと契約し、128Kbpsの専用回線を敷いた。年間にすれば数百万円のコストがかかっている。大企業ならいざ知らず、「将来への投資」で済ませられる額ではないと思うのだが、この算盤勘定はいかに。

「データベース作成の参照のため米国の議会図書館のデータベースなどにアクセスする機会も多いのですが、付加費用なしにこれが使えらるのも大きなメリットですね。また、印刷物や磁気媒体を郵送で行っていたデータ提供を、ネットワーク経由にし、そのルートで使って頂けるお客さんが増えてくれれば、この専用線への投資は十分回収していける目算です。それを促すためネットワーク経由で提供する場合は価格を下げてもいいです」(菅原さん)

また、サーバーの立ち上げに際しても、たいした手間はかかっていないという。社内のプログラマーが4～5日かっただけで、HTML化や文字コード変換の問題もクリアできたという。

期待される「総合目録」データベース

書誌データベースをインターネットで公開するという同社の試みの延長線に見え

てくるのが、図書館学会の悲願である「総合目録」である。どんな本がどこの図書館に所蔵されているかを知るための横断的な総合蔵書データベースのことだ。少なくともTRC MARCをもとにした、図書館からの「発注」データは、「納品」された後に「蔵書」となる。同社の顧客をネットワークするだけでも、相当なデータベースができあがる。

「これまで総合目録として想定されていた形は、データを1か所に集める方法でしたが、ネットワークがこんな形で普及してくると、同じプロトコルで通信できるデータベースにさえなっていれば分散型でもいいじゃないかという話になっていた。当社の場合新刊書が中心ですが、過去の書籍をどんどんデータベースに加える作業をしているところもあり、あちこちで分担して進めれば、総合目録の実現は案外近いところにあるのではないかと思います。あとはインフラとしてのインターネットがどれだけ普及してくれるかにかかっていると思います。なにしろいまインターネットがこれだけ普及し始めているということを5年前には誰も想像していなかったわけですから」(菅原さん)

公共図書館で7割のシェアを持ち、いち早くインターネットとの接点を持ち始めた同社のTRC MARCは、その暁にどんな役割を果たすのか。見守っていきたいと思う。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp